

平成21年11月24日

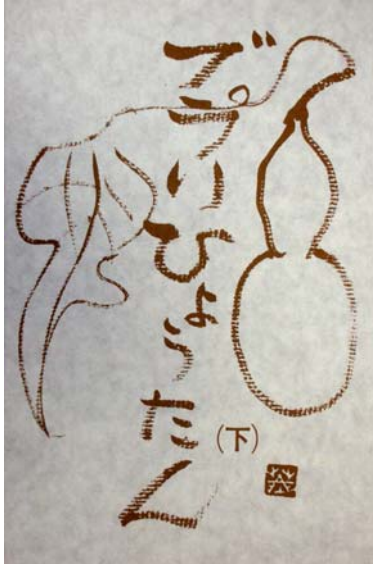
茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会
旧本館活用委員会

前号に高田保の名が見えたが、高田の活躍当時とは大きく時代が隔たった皆さんにはその名も卒業生Aと言うに等しかったのではなかろうか。本校は創立以来今日まで様々な分野に数多くの人材を送り出してきたが、文学において、高田保は本校最右翼のOBとあってよい存在である。ちなみに『20世紀日本人名事典』を繰ってみると、その冒頭は次のように記されている。《高田 保（1895～1952）大正・昭和期の劇作家・演出家・随筆家・小説家・映画監督・俳号羊軒 戦後の昭和23年12月から東京日日新聞に随筆『ブラリひょうたん』を連載、ウィットとユーモアに富んだ社会風刺で喝采を博した。》その賛辞もさることながら、これほど多芸多才な作家も珍しい。今回は高田保について、中学時代の級友下村千秋も若干からめながら、そのあらましにふれてみたい。



「ブラリひょうたん」執筆当時の高田 保

「ブラリひょうたん」表紙（題字・表紙原画ともに高田 保） →



ブラリひょうたん

高田 保（中12回） 前編

トップ入学、卒業は???

保が旧土浦中を受験したのは明治四十一年四月、発表の様子については下村千秋による当時の回想が残されている。

朝日村（現阿見町）では抜群の成績ながら、難関とされていた土浦中だけに、まったく自信が持てなかつた千秋は「受かるにしても下のほうと、成績順に発表される入格者氏名を最後のほうから見ているが、懸念したとおり見当たらぬ。念のため最上位に目をやると自分の名前が一番目にあつた。驚きながら一番はうと見るとそれが高田保だつた」といふ。農村のそれもさほど豊かとも言えない家庭に育ち、級友から「下村いさん」のあだ名をもらつたほど地味な存在の千秋。一方は千族の出で、土浦の町育ち、弁護士でシエークスピアを原文で読み、俳人でもあつたという伯父を持つ保は、才気煥発、話はずまく面白く、気がつき気がきく人気者。上下級生の別なく交際範囲も広かつた。一年時の「生徒監警簿」指導上の参考として生徒の性格等について記されたものには「機敏ニシテ伶俐、器用親切、人望ハ同級生中第一ナリ」とあるとおり、保は各学年、ともに級長をつとめた。生徒時のエピソードも多いが、一つだけ挙げてみよう。

中学二年時だつた。東洋史の時間に先生が突然今日

日は試験だ」といい出して答案用紙を配り、黒板に大きく「唐時代の内乱について記せ」と問題を書いてきつたと教室から出て行つてしまつた。足音が遠ざかる。すぐには戻りそうもなさそうだとわかると、誰も彼も机の下から教科書やらノートやら取り出して大急ぎで書き取つた。保はそれができないまま、やがて先生が戻り答案は回収された。そして次の時間、先生の結果公表は「みんな善点だぞ！こんな問題を突然に出されて正確な答えをいふなんて、カンニングをやつた証拠だ。君たちの根性を試すのにわざと職員室に行つていたので、教科書やノートを見て書いたのは見なぐともわかつた。その点、一番できていなかった答案の高田が一番立派だ。これに百点をやる」だつた。これに保はすさまじく抗議した。「あれはあくまで歴史の試験で人格の試験ではなかつたはずだ。だからそんな不合理な採点はない。せつかくの百点が返下する」と申し出たのだつた。

さて五年時になると監督簿も少しと趣を異にし「著シク現代カブレシタルフウアリアテ文的な生活三憶懐ス」とあり、未来の保の下の形成がうかがえる。保も千秋も成績は下降した。当時は落第があり入学時の百人は七十人に減つていたが、保は十五番にまで下がつた。旧中は五年制なので「二期に一番すつた」といふ話になつて伝わるが、これは有名な人につきものの伝説で、そう順序よく下がつたわけでもなさそうだ。低下の主因は「監督簿」が見抜いてたどり、勉強上りも文学のほうに惹かれはじめたことによる。

千秋もこの点奇しくも共通で、早大英文科に進んだ保の後を千秋も事情で一年遅れはするものの追いかけるように同じ科に進む。

銀ブラ十年三千里

東京に出た保は、時代の先端をゆくモダンボーイたるべく足しげく銀座に通つた。「銀ブラ……」という半生を振り返つての前掲のことは彼の銀座への思い入れが詰まつていふ。銀座のその「この女娼ら、タクシーの運転手や街角の靴磨きまでが保には挨拶するほど銀座マンはみんな友達だつた。

もう一つの根拠地が浅草劇場街。当時の浅草はいわゆる「浅草オヘア」全盛期。大震災前の浅草にはオペラや演劇

の常打ち館が軒を連ねて、銀座とはひと味違つた繁華街だつた。当時の保は脚色・演出に才をふるい、白井喬二の「軍士に立つ影」のような主演に十時間を要する大物から一幕物まで、器用に手早くなんでもこなして重宝がられていた。

昭和の大恐慌とルンペン文学

何事にも保に後れをとつていたかに見えた千秋だつたが、文壇で先に名をあげたのは千秋のほうであつた。大空後読新報社社部記者となるが、ほゞなく退職・創作の道に進む。同期生で発刊した同人誌に発表した「ねぐら」という作品が志賀直哉の目にとまり、この縁で直哉を終生の師と仰ぐことになる。結婚を機に東京市役所に就職するが、大正十一年関東大震災後に退職、作家生活に入る。昭和五年『中央公論』に『天国の記録』を発表、次いで同年末に朝日新聞に連載の『街のルンペン』が大評判となり一躍流行作家となる。前作は私娼の悲惨な生涯を、後のはその日暮りの失業浮浪者のどん底の生活を、いずれもルポルタージュふうで描いたもので、当時の暗い世相とも相まつて話題を呼び、特に『街のルンペン』は当時のトップ女優島崎雪子主演で映画にまでなつた。ルンペンはドイツ語から来たもので「ぼろ（襤褸）の原義から実業者・浮浪者の意に転じた。だが使われたのは千秋のこの小説からで、当時の流行語にもなり、その後類似のテーマの作品が続々生まれるきっかけとなつたことから、千秋はルンペン文学の先駆とされる。

旧本館には、保千秋の様々な資料が展示されている。



羊軒